

## 嶋田洋一郎訳 『ヘルダー民謡集』

田口, 武史

<https://doi.org/10.15017/3053990>

---

出版情報 : 九州ドイツ文学. 33, pp.79-81, 2019-10-30. 九州大学独文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 嶋田洋一郎訳『ヘルダー民謡集』

田 口 武 史

本書には、J. G. ヘルダー編『民謡集』(Volklieder, 1778/1779) から162篇、および——ヘルダーの死後、J. v. ミュラーがこれを再編して出版した——『歌謡における諸民族の声』(Stimmen der Völker in Liedern, 1807) から補遺15篇の訳詩が収められている。<sup>1)</sup> 本邦初の、待望久しい全訳である。800頁に迫らずしりと重い本書を手にとると、訳者の嶋田洋一郎氏がこの仕事にどれほどの労力を注ぎ込んだか自ずと想像される。

周知のごとくヘルダーの『民謡集』は、近代ドイツにおける民衆文学史および Volk の概念史を説明する際、その劈頭に掲げられるべき記念碑的著作である。特にロマン派による民衆文学賛美を歴史的文脈で理解するには、先駆者たるヘルダーと彼の『民謡集』が及ぼした影響を踏まえておくことが必須である。しかし、嶋田氏が「〔ヘルダーとは〕人間についての夥しい数の言葉の塊である」<sup>2)</sup>と印象的に表現するとおり、ヘルダーの著作物は実に龐大である。これを前にして怖気づかない日本人研究者は、そう多くないのではあるまいか。加えてこれまでは『民謡集』の全訳が存在しなかった。その重要度に比して『民謡集』を掘り下げて検討した論文が少ないのは、やはりここに起因すると思われる。

たしかにヘルダーの主要作品の多くは邦訳されており、また直接民謡に関わる「オシアン論」や「中世英独詩芸術の類似性」(ともに1773年発行の『ドイツの特性と芸術』に所収)などの理論的著作も古い訳だが日本語で読むことができる。またかかる理論的著作について論じた先行研究も蓄積されている。これらをとおして我々は、ヘルダーの民謡観にかなりの程度まで接近できるであろう。しかし、なお腑に落ちない心地がする。民謡を論じる際の前提となる Volk を、ヘルダーがどのようにイメージしていたのか、その全体像がいまひとつ把握できないからである。彼の Volk 観に焦点を合わせた研究論文も少なくないが、それらを読んでも、今度は論者の Volk に対するイデオロギーが解釈や訳語の選択に影響しているのではないかという疑念が湧いてくる。我々は、Volk が決定的な動因となったと言っても過言ではない19世紀以降のドイツ史を知っている。その視点から離れて、ヘルダーの言う Volk をそのまま受け取ることは実に難しい。

ただしこれは、本質的には翻訳の問題ではない。多義的な Volk という語はそもそも、これが用いられ、受け取られる文脈の中でしかその意味を看取できない。ましてや Volkslied は、ヘルダーの造語である。つまりそれまでは、Volk と Lied との組み合わせはいわば撞着語法であり、両者を繋ぐ発想などなかったのである。文字を前提とする Literatur ならばまだしも、「声の文化」に属する Lied までもが Volk と呼ばれるような人々には認められなかった——ヘルダーの提唱した新しい文学観と Volk 像がいかに革新的であったかが伺えよう。

最近、幾人かの作家が、国民あるいは市民社会の中で最も人数の多い集団、あるいは最下層の集団という意味における Volk の名誉を回復させようと努めた。願わくは、この試みが広く世に認められんことを。国家の中で最も人数が多いが、不当にも最も蔑まれている集団を、公明正大で悪意なく指し示すような単語はないのだから。<sup>3)</sup>

これは、1801年に発行された J. Ch. アーデルング『高地ドイツ語の文法的・批判的辞典』の Volk の項に見られる説明である。「幾人かの作家」の中には、間違いなくヘルダーも含まれる。Volkslied を用語として定着させた功績は彼のみには帰せられるものでもないが、こうした状況にもかかわらず Volk の見方も Lied の見方も変えるに至った訴求力が『民謡集』のどこにあったのだろうか。ヘルダーが歌謡をとおして提示した肯定的 Volk 像は、いかにして「広く世に認められ」るようになったのだろうか。

その答えを探して本書を紐解くと、初めから意表を突かれる。第1部第1巻でドイツ語の歌に続くのは英語の歌、さらにリトアニア語3篇、ドイツ語1篇、英語1篇、スペイン語4篇と、異なる出自の歌が散りばめられているのである。それぞれの Volk (民族) が有する特性を明らかにし、とりわけドイツの民族性を際立たせる目的で編まれた民謡集であるという先入観は、これによって否定される。『民謡集』は——再編された『歌謡における諸民族の声』とは異なり——言語圏・文化圏別の配列がなされていない。<sup>4)</sup>上に挙げた諸語の歌に加え、スコットランド語、低地ドイツ語、ソルブ語、リトアニア語、デンマーク語、ラップランド語、フランス語、ギリシア語、ラテン語など、多種多様な言語からの歌が、順番も数もランダムに掲載されているのだ。また、シェイクスピアの作品から8篇もの歌が採用され、ゲーテやヘルダー自身の手になる作品も含まれる。この文化的・時代的多様性の中に「世界全体を見渡すヘルダーの視線」(765頁)、すなわちフマニテートが感じ取られ、とかくナショナリズムとの連関で問題視される Volk 像とは正反対の印象を受ける。

歌の内容には、ごく緩やかだがまとまりや連続性がある。たとえば第1部第1巻には、様々な国の悲恋の歌が多く収められている。第2巻は無垢な少女の歌に始まり、処女を失った娘が嘆き、戦場へ向かう若い騎士が勇ましく歌うが、その末路が暗示され、続く歌では不吉な予言どおり沼に沈みゆき、世の無常が詠ぜられる。舞台を引き継ぐように次の歌は森の中で死んだ子供の話、さらにその次はユダヤ人の娘に殺された子供の話である。歌と歌は合理的な意味連関を持つのではないが、どこかでかすかに触れ合っている。それらは異なる言葉で、異なる時代に、異なる人々によって歌われた。これを無理やり何らかの範疇に押し込め、分類するのではなく、多様なものを多様なまま並置し、しかも全体として人間の普遍的な有り様、「人間学的な共通点」(766頁)を豊かに描き出す構成である。近年のヘルダー研究では、現代を先取りするような多文化主義を提唱した人物として彼を再評価する傾向にあるようだが、この『民謡集』の翻訳は、そうした見解を雄弁に弁護することとなろう。日本語でテンポよく読むことで、多様性と共通性の絶妙なバランスがより実感できるからである。

この観点で、取り混ぜられた歌の間にある見えない繋がりを想像しながら読み進めてゆ

くと、最後にヘルダーの次のような言葉が待っていた。

分別のある者であれば誰もがそれぞれの作品をその現場で考察し、その作品がそれ自体で存在するもの、そこにあるべきものと見なすだろう。すなわち誰もが一息で読み進めたり、目まいを起しそうになりながら民族から民族へと熱中したりせず、あちらこちらで自分の気に入らないものがあったとしても、その作品をそれにふさわしい他の者に委ねるであろう。(661頁)

全体を統括する意味や意味を作り出す連関を探そうとするこちらの意図は、完全に見透かされていた。『民謡集』は、どこでも好きなページを開き、目に留まった歌を楽しむように作られているのだ。上の引用は、民謡の価値を認められない当時の啓蒙的知識人を牽制する言葉であろうが、我々もヘルダーの勧めに従って、まずはそれぞれの歌に耳を傾けよう。この翻訳によって、古いドイツ語による韻文の難しさが克服されたのみならず、見慣れぬ地名や人名、歴史や神話、文学史的背景に関する丁寧に豊富な訳注のおかげで、読みを中断して検索する必要もなくなったのであるから。そうすれば我々も、「花束となって愛らしく結ばれた」(3頁) Volk の歌を、2世紀半前の読者のごとく新鮮な驚きをもって受け取れることであろう。

## 注

- 1) 嶋田洋一郎訳『ヘルダー民謡集』九州大学出版会、2018年。以後、本書からの引用は括弧内にページ数のみ記す。
- 2) 嶋田洋一郎「〈紹介〉ヘルダーとは何か」(岩波書店『思想』2016年5月号「特集：J. G. ヘルダー — 近代の詩的思考 —」8頁。
- 3) Johan Christoph Adelung.: *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen*. Zweite vermehrte und verbesserte Ausgabe. Bd.4. Leipzig 1801, Sp.1225f. (Neudruck: Hildesheim/Zürich/New York 1990)
- 4) ヘルダーがナショナリズムの志向で民謡を収集したという先入観は、「十九世紀から二十世紀にかけて出版されたヘルダーの民謡集のほとんどの版は、十八世紀に刊行された『民謡集』ではなく、十九世紀初頭のナポレオン戦争の時期に出版された『歌謡における諸民族の声』であった」(768頁)という事情と関わっている。その意味で、『民謡集』が邦訳されたことは大きな意味を持つ。

(九州大学出版会、2018年)